

友人関係への動機づけの下位概念について

—維持動機づけと形成動機づけ—

On Sub-concepts of Motivation to Friendship
-Sustaining Motivation and Making Motivation-

新美秀和・西川祐磨*

Niimi Hidekazu, Nishikawa Yuma

要 約

岡田（2008）は友人関係の個人差を生み出す要因として「友人関係への動機づけ」という心理変数を挙げ、それを組み込んだ友人関係形成モデルを提唱した。このモデルでは友人関係が得られると、関係の中での良好な経験は友人関係への動機づけを高めるようフィードバックされる。しかし日常生活において、いったん満足できる友人関係が形成されるとそれ以上新たに友人関係を開拓しないということもしばしば見受けられるだろう。そこで本研究では、岡田の動機づけを「友人関係形成動機づけ」と「友人関係維持動機づけ」に分け、現状の友人関係への満足度によってこれらの動機づけの強さが異なるかどうかを検証した。その結果、満足度という観点からは、形成動機づけと維持動機づけを分けるのは妥当ではないということが分かった。しかし、友人に対する他の感情をも考え合わせるなら、この分別には一定の意義があることも明らかとなった。

Key Words : 友人関係, 動機づけ, 友人関係形成, 友人関係維持, 自己決定理論

目 的

親密な友人関係は青年にとって心理的に非常に重要だとされる（例えば Baumeister & Leary, 1995; Buhrmester, 1996）。しかしいうまでもなく、誰もが等しく親密な友人関係を築いているわけではない。だが、個人差を生み出す要因についての研究はこれまで乏しかった。

岡田（2008）はこの個人差を説明するために、「親密な友人関係を築く動機づけ」という心理変数を導入したモデルを提唱している。彼のモデルは図1に示される通り、循環モデルである。動機づけが作動することによって友人関係行動が起これり、結果として親密な友人関係が形成されていくのだが、その関係の中でのさまざまな経験が友人関係に対する動機づけにフィードバックされるという循環である。このモデルを用いると、親密な友人関係の個人差についてさまざまな要因を用いて説明できる上、それら要因間の関係もよく説明できる。

岡田は、このモデルはいくつかの異なる動機づけ理論に基づく研究知見とも適合すると述べている。例えば動機づけ理論のうち自己決定理論の観点からは、自律的動機づけが自己開示などの友人関係行動を促し、友人からの好意や信頼感に影響することが分かっている（Okada, 2007; Richard & Schneider, 2005）。また、達成目標理論の観点からは、経験・成長目標や評価・接近

*聖泉大学卒業生（2011年3月卒業）

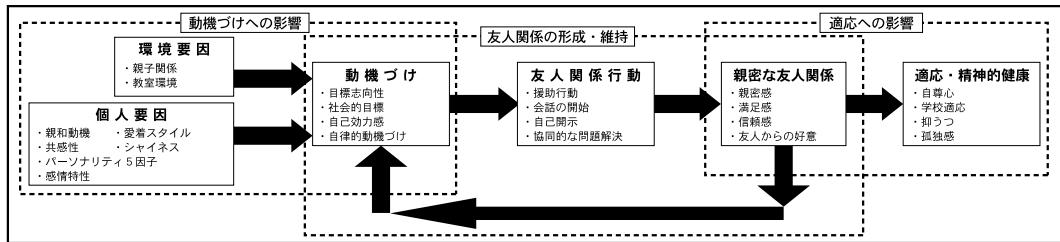


図1 親密な友人関係の形成・維持過程に関するモデル（岡田，2008より作成）

目標が積極的な会話の開始や援助行動を促すことで、友人からポジティブな反応を引き出し、友人関係に対する充実感が高まることが明らかにされている（黒田・桜井,2005）。社会的目標研究の観点からも、友人との間に親密な関係を築こうとする共同目標が向社会的行動を介して級友からの好意に影響することが明らかにされている（Ojanen, Gronroos, & Salmivalli,2005）。

ところで岡田のモデルでは、親密な友人関係がいったん形成された場合、そこでの経験は動機づけにポジティブなフィードバックがあるとされている。しかし、それはモデルとして妥当なのだろうか。例えば、友人関係形成行動の結果、幸いにも良好な関係が形成されたとしよう。この時、今形成された関係に対しては満足感が得られるであろう。またその結果、その友人関係を維持しようという動機づけにはプラスのフィードバックがあるかもしれない。だが、新たな友人関係の形成に対する動機づけはどうか。いま得られた満足経験はむしろ、新たな友人関係を開拓しようという動機づけを低下させるのではないだろうか。

そこで本研究では、岡田のモデルにおける「友人関係への動機づけ」を「親密な友人関係の形成に対する動機づけ」と「維持に対する動機づけ」の2つに分けて考えたい。その上で、「現状の友人関係の満足している群とそうでない群を比較すると、前者は後者よりも維持動機づけは高く、形成動機づけは低い」という仮説を立て、その妥当性を検討したい。また、友人に対するどのような感情が動機づけに対して影響を及ぼすかもあわせてみていく。

方 法

1. 被調査者

2010年10月下旬、近畿圏にある私立大学2校において大学生177名を対象に実施した。記入漏れや不参加などで11名分のデータを除き、有効回答者数は166名（男子85名女子81名）であった。

2. 質問紙の構成

質問紙は、「友人関係形成動機づけ(以下、形成動機づけと略記する)」「友人関係維持動機づけ(以下、維持動機づけと略記する)」「友人に対する感情」「現状の友人関係への満足感(以下、満足度との略記する)」の4つの側面を測定する心理尺度から構成した。

2.1. 「形成動機づけ」尺度および「維持動機づけ」尺度の作成

本研究では岡田（2005）の「友人関係への動機づけ尺度」を改変して、「形成動機づけ」「維

持動機づけ」の強さを測定する尺度を作成することとした。岡田の尺度は自己決定理論を背景として友人関係への動機づけの強さを測定する尺度である。「外的理由」「取り入的的理由」「同一化的理由」「内発的理由」の4下位尺度をもつとされている。

この尺度の質問項目の文末に加筆をすることにより、「形成動機づけ」と「維持動機づけ」の強さを測定できるようにした。例えば、岡田(2005)での「友人がいないと後で困るから」という質問項目は「友人がいないと後で困るから新しく友人を作りたいと思う」(「形成動機づけ」の場合)、「友人がいないと後で困るから今いる友人を大事にしようと思う」(「維持動機づけ」の場合)と加筆した。他の加筆例は下表1の通りである。なお、加筆部分は太字で示した。

表1 形成動機づけ・維持動機づけ尺度項目の例

形成動機づけへの加筆例	維持動機づけへの加筆
友人がいないと後で困るから 新しく友人を作りたいと思う。	友人がいないと後で困るから 今いる友人を大事にしようと思う。
友人がいないと不安だから 新しく友人を作りたいと思う。	友人がいないと不安だから 今いる友人を大事にしようと思う。
友人がいないのは恥ずかしいことだから 新しく友人を作りたいと思う。	友人がいないのは恥ずかしいことだから 今いる友人を大事にしようと思う。
友人とは親しくしておくべきだから 新しく友人を作りたいと思う。	友人とは親しくしておくべきだから 今いる友人を大事にしようと思う。

以上のように改変することにより、「形成動機づけ」と「維持動機づけ」の尺度を作成した。なお各質問には「当てはまらない(1点)」から「当てはまる(5点)」の5件法で回答を求め、高得点になるほどその動機づけが強くなるよう得点化した。

2.2. 「友人に対する感情」尺度

榎本(2000)によって作成された「友人との活動,友人に対する感情,友人への欲求の質問紙」(堀,2007所収)を用い,友人に対する感情を測定することとした。この尺度は,青年期の友人関係を対象に作成された尺度で,この中の「友人に対する感情」の尺度全25項目を用いることとした。友人に対する感情尺度では,「まったく思わない(1点)」から「とてもよく思う(6点)」の6件法で行ない,得点が高くなるほどその感情が強くなるように配点した。

2.3. 「満足感」尺度

加藤(2001)の「友人関係に関する主観的満足感」を用いた。これは青年を対象に作成された全6項目の尺度であり,1因子構造が確認されている。「当てはまらない(1点)」から「よく当てはまる(4点)」の4件法で実施し,得点が高くなるほど満足度が高くなるように得点化した。

3. 調査手続き

調査は,各大学の講義時間に集団法で実施した。まず,研究主体および研究目的について明示したあとに個人情報の保護のための具体的方策を説明し,その上で質問紙調査に対して参加に同意するかどうか各判断してもらった。参加に同意してもらえる被調査者にのみ,上記の各心理尺度について回答を求めた。

結 果

1. 各心理尺度の因子構造

「形成動機づけ」「維持動機づけ」「友人に対する感情」「満足度」の4つの心理尺度得点をそれ

ぞれ因子分析（主因子法，プロマックス回転：以下の因子分析も同様）にかけた。因子数は，スクリープロット基準および解釈のしやすさを考慮して決定した。また，複数の因子で負荷量が.4以上であった項目および最大因子負荷量が.4を下回った項目があればその項目を削除して再度因子分析にかけることとした。計算には PASW Statistics 18を用いた（以下，本研究の計算はすべて同ソフトで実施）。

その結果，「形成動機づけ」尺度からは2項目が削除され，2因子が抽出された（表2）。

表2 形成動機づけ尺度の因子構造

		因子1	因子2
A12	友人と話すのは面白いから新しく友人を作りたいと思う	.905	-.055
A3	友人と一緒に時間を過ごすのは重要なことだから新しく友人を作りたいと思う	.855	-.021
A5	友人と親しくなるのはうれしいことだから新しく友人を作りたいと思う	.832	.029
A10	友人と一緒にいるのは楽しいから新しく友人を作りたいと思う	.826	-.127
A11	友人と一緒にいると楽しい時間が多いから新しく友人を作りたいと思う	.811	-.046
A6	友人といくと幸せになれるから新しく友人を作りたいと思う	.802	.073
A2	友人関係は自分にとって意味のあるものだから新しく友人を作りたいと思う	.798	-.102
A1	友人と親しくしておくべきだから新しく友人を作りたいと思う	.700	.131
A13	友人とのことをよく知るのは価値があることだから新しく友人を作りたいと思う	.518	.210
A16	友人関係を作っておくように周りから言われるから新しく友人を作りたいと思う	-.105	.808
A9	一緒にいないと怒られるからその人と友人になろうと思う	-.241	.692
A8	親しくしていないとがっかりされるからその人と友人になろうと思う	.108	.682
A15	友人がいないことは恥ずかしいことだから新しく友人を作りたいと思う	.114	.647
A14	友人がいないと後で困るから新しく友人を作りたいと思う	.301	.490
	因子間相関		.234

因子負荷量の高かった質問項目の内容から，因子1は「内発的形成動機づけ」，因子2は「外発的形成動機づけ」と名付けた。なおここでいう内発的動機づけとは楽しさや喜びなどのポジティブな感情を理由とした自主的で自発的な動機づけであり，外発的動機づけとは不安や義務感などのネガティブな感情を理由とした動機づけである。

「維持動機づけ」尺度からも2因子が抽出された（表3）。削除項目はなかった。

表3 維持動機づけ尺度の因子構造

		因子1	因子2
B3	友人と一緒に時間を過ごすのは重要なことだから今いる友人を大事にしようと思う	.894	-.026
B2	友人関係は自分にとって意味のあるものだから今いる友人を大事にしようと思う	.879	-.070
B12	友人と話すのは面白いから今いる友人を大事にしようと思う	.845	-.048
B10	友人と一緒にいるのは楽しいから今いる友人を大事にしようと思う	.835	-.086
B11	友人と一緒にいると楽しい時間が多いから今いる友人を大事にしようと思う	.812	-.077
B5	友人と親しくなるのはうれしいことだから今いる友人を大事にしようと思う	.811	-.027
B6	友人といくと幸せになれるから今いる友人を大事にしようと思う	.744	.036
B13	友人のことをよく知るのは価値のあることだから今いる友人を大事にしようと思う	.491	.147
B1	友人と親しくしておくべきだから今いる友人を大事にしようと思う	.485	.314
B15	友人がいないのは恥ずかしいことだから今いる友人を大事にしようと思う	-.072	.719
B8	親しくしていないと友人ががっかりするから今いる友人を大事にしようと思う	-.023	.703
B16	友人関係を作っておくように周りから言われるから今いる友人を大事にしようと思う	-.125	.696
B9	一緒にいないと友人が怒るから今いる友人を大事にしようと思う	-.338	.668
B14	友人がいないと後で困るから今いる友人を大事にしようと思う	.274	.594
B7	友人がいないと不安だから今いる友人を大事にしようと思う	.347	.546
B4	友人の方から話しかけてくるから今いる友人を大事にしようと思う	.255	.436
	因子間相関		.234

こちらも形成動機づけと同様に2因子に分かれ，因子負荷量の高かった質問項目の内容から因子1を「内発的維持動機づけ」，因子2を「外発的維持動機づけ」と名付けた。

「友人に対する感情」尺度からは5因子が抽出された（表4）。削除項目はなかった。

表4 友人に対する感情尺度の因子構造

		因子					
		1	2	3	4	5	
C18	友達を信頼している	0.757	-0.011	0.052	0.043	-0.092	
C7	友達とは気持ちが通いあっている	0.727	0.094	0.031	0.01	0.032	
C23	友達は私を絶対に裏切らないと思う	0.712	-0.293	0.229	-0.018	-0.027	
C13	友達は私のことならだいたい知っている	0.629	0.054	-0.188	-0.016	0.187	
C12	心から友達を親友と言える	0.627	0.022	-0.194	-0.02	0.156	
C25	友達とはだいたい意見が合う	0.622	0.097	0.116	0.093	-0.164	
C8	自分は友達に十分受け入れられていると思う	0.536	-0.015	0.018	0.192	-0.246	
C11	友達の考えていることはだいたいわかる	0.511	0.088	-0.102	-0.021	0.371	
C1	友達に裏切られるのではと思う	-0.162	0.812	-0.118	0.068	0.06	
C2	友達の考えていることがわからなくなって不安になる	0.035	0.764	0.127	0.108	0.025	
C10	自分が友達にどう思われているか気になる	0.159	0.745	0.006	-0.081	-0.128	
C21	自分が本当に友達だと思われているか気になる	0.103	0.641	0.143	-0.039	0.017	
C6	友達に「仲間はずれにされた」と感じることもある	-0.147	0.609	0.231	0.041	-0.046	
C16	友達の方がテストの点がいいと不安になる	-0.026	-0.119	0.823	0.101	0.239	
C19	友達と意見が違うと不安になる	0.068	0.079	0.651	-0.189	-0.04	
C15	友達が自分の知らない友達と話しているのを見て寂しさを感じる	0.103	0.135	0.527	-0.051	0.077	
C3	友達の誘いを断れず困る	0.151	0.142	0.491	-0.152	-0.053	
C24	自分の思っていることを友達に言えない	-0.092	0.191	0.467	-0.154	-0.018	
C4	友達といると自分のやりたいことができない	-0.284	0.058	0.452	0.224	-0.014	
C20	友達のやっていることに引きずりこまれて困る	0.011	0.196	0.408	-0.029	0.23	
C9	友達と一緒にいても自分の意志で行動している	0.09	0.079	0.032	0.749	-0.005	
C5	友達と違う意見でも自分の意見はきちんと言う	0.023	0.074	-0.164	0.58	0.058	
C22	友達と意見が対立しても自分をなくさないでいられる	0.065	-0.104	-0.003	0.568	-0.041	
C14	友達よりいい学校に行きたい (いい仕事につきたい)	0.033	-0.001	0.11	-0.048	0.606	
C17	友達には様々な点で負けたくない	-0.042	-0.085	0.407	0.124	0.542	
因子間相関		1	—	-0.064	-0.088	.139	.018
		2	—	—	.608	-0.185	.292
		3	—	—	—	-0.270	.236
		4	—	—	—	—	-0.050
		5	—	—	—	—	—

質問項目の内容から因子1は「信頼」、因子2は「不透明さへの不安」、因子3は「差異への不安」、因子4は「独立意識」、因子5は「ライバル心」と名付けた。因子2の不安は友人が内心でどう考えているのか分からないことからくる不安であり、因子3の不安は友人と自分の違いが突き付けられたときに生じる不安であると解釈した。

最後に「満足度」尺度であるが、スクリープロットから明確に一因子構造が確認されたため、加藤(2001)同様下位尺度は設けず、全項目を採用した。

2. 仮説の検討

最初に被調査者を満足度の得点により満足群と不満足群とに分けた。満足度得点の平均値は15.31 (SD = 3.84)であったため、満足度15点以下を不満足群 (n=82)、16点以上を満足群 (n=84)とすることにした。以下に、仮説を検証していく。なお、各尺度の因子得点は、その因子に最も強い負荷量のある質問項目の得点を単純加算した。また α 係数は「内発的形成動機づけ」で.933、「外発的形成動機づけ」で.794、「内発的維持動機づけ」で.917、「外発的維持動機づけ」で.817、「信頼」で.846、「不透明さへの不安」で.865、「差異への不安」で.827、「独立意識」で.683、「ライバル心」で.648であった。

2.1. 満足群と不満足群の動機づけ得点の比較

ここでは、仮説「現状の友人関係の満足している群とそうでない群を比較すると、前者は後者よりも維持動機づけは高く、形成動機づけは低い」を検討するべく、満足群および不満足群における各種動機づけ得点を算出した。次に、t検定（両側検定、有意水準5%）によって満足群と不満足群の差を検討した。その結果、内発的・形成動機づけ（ $t=2.078$, $df=164$ ）と内発的・維持動機づけ（ $t=1.993$, $df=164$ ）で有意な差が見いだされた（いずれも満足群>不満足群）。

表5 満足群と不満足群の動機づけ得点の比較

		内発的		外発的	
		形成動機づけ	維持動機づけ	形成動機づけ	維持動機づけ
満足群 (n=84)	平均	36.392	39.024	11.786	18.940
	SD	7.145	6.287	4.226	6.085
不満足群 (n=82)	平均	34.993	36.878	11.610	18.549
	SD	8.392	7.463	4.482	6.210
		$p<.05$	$p<.05$	n.s.	n.s.

次に、満足群と不満足群の友人への感情得点を算出し、t検定（両側検定、有意水準5%）によって比較した。結果は以下の表6の通りである。

表6 満足群と不満足群の「友人への感情」得点の比較

		信頼	不透明性 への不安	差異への 不安	独立	ライバル
		満足群 (n=84)	平均	34.929	16.893	18.548
	SD	4.733	5.518	6.080	2.792	2.487
不満足群 (n=82)	平均	25.939	18.122	20.207	12.122	6.037
	SD	5.324	5.925	6.896	2.643	2.684
		$p<.05$	n.s.	n.s.	$p<.05$	n.s.

表6にも示された通り、有意な差が見られたのは「信頼」（ $t=11.434$, $df=164$ ）と「独立意識」（ $t=2.151$, $df=164$ ）の2つであり、いずれも満足群のほうが高いという結果であった。

2.2. 「友人に対する感情」の動機づけに対する影響

ここでは4つの動機づけは友人へのどのような感情に影響を受けているかを検証することとした。まず満足群についてみていき、次に不満足群についてみていくこととする。

最初に満足群における友人に対する感情5つについて、Pearson積率相関係数を求めた。結果は以下の表の通りである。

表7 「友人に対する感情」間の相関係数（満足群／不満足群）

	信頼	不透明さへの不安	差異への不安	独立意識	ライバル心
信頼					-
不透明さへの不安	-0.18 / -.390				-
差異への不安	-.081 / .060	.600* / .660*			-
独立意識	.247* / .026	-.253* / -.028	-.294* / -.236*		-
ライバル心	-.026 / -.037	.220* / .422*	.330* / .506*	-.099 / -.086	-

数値は満足群／不満足群

* : $p<.05$

満足群では「不透明さへの不安」と「他者との差異への不安」の相関が中程度に強いという結果になった。一方、不満足群では「不透明さへの不安」「差異への不安」「ライバル心」の3つの

あいだで中程度に高い相関が見られた。

次に4種の動機づけを説明変数に、「友人に対する感情」を目的変数として重回帰分析（強制投入法，有意水準5%）を満足群，不満足群それぞれで行った。結果は以下の表8の通りである。なお多重共線性の問題については，VIFが満足群で1.069-1.728，不満足群で1.012-2.178といずれも10以下であったため，生じなかったと判断した。また決定係数R²は有意もしくは有意傾向であり，「友人に対する感情」5つを説明変数として取り上げるのは妥当であると判断した。

表8 標準化偏回帰係数と決定係数（満足群／不満足群）

		信頼	不透明さへの不安	差異への不安	独立意識	ライバル心	R ²
内発的	形成動機づけ	.206 ⁺ / .190 ⁺	.140 / .030	-.163 / -.002	.198 ⁺ / -.429 [*]	.227 [*] / .211 [*]	.160 [*] / .280 [*]
	維持動機づけ	.257 [*] / .362 [*]	.168 / .318 [*]	-.175 / .107	.111 / -.248 [*]	.057 / -.120	.123 [*] / .245 [*]
外発的	形成動機づけ	.036 / .073	.306 [*] / -.092	.162 / .431 [*]	.021 / -.343 [*]	.158 / .221 [*]	.237 [*] / .474 [*]
	維持動機づけ	.182 ⁺ / .128	.258 [*] / -.019	.257 [*] / .432 [*]	-.125 / -.383 [*]	.133 / .082	.334 [*] / .467 [*]

+ ; p<.1 * ; p<.05

満足群では，「内発的・形成動機づけ」は「信頼」「独立意識」「ライバル心」から，「内発的・維持動機づけ」は「信頼」から有意な（もしくは有意な傾向の）影響を受けていた。「外発的・形成動機づけ」は「不透明さへの不安」から，「外発的・維持動機づけ」は「信頼」「不透明さへの不安」「他者との差異への不安」から有意な（もしくは有意な傾向の）影響を受けていた。

一方不満足群では，「内発的・形成動機づけ」は「信頼」「独立意識」「ライバル心」から有意な（もしくは有意な傾向の）影響を受けており，「内発的・維持動機づけ」は「信頼」「不透明さへの不安」「独立心」から有意な影響を受けていた。「外発的・形成動機づけ」は「差異への不安」「独立意識」「ライバル心」から影響を受けており，「外発的・維持動機づけ」は「差異への不安」「独立心」からそれぞれ有意な影響を受けていた。不満足群における「独立意識」のみ，全ての動機づけに負の影響を与えているという結果となった。

考 察

1. 仮説の検証

本研究は，岡田（2005）における「友人関係動機づけ」は「友人を新たに作っていく動機づけ」と「現状の友人関係を維持しようとする動機づけ」の2つに分けられるべきではないかと考え，「現状の友人関係への満足群は不満足群よりも維持動機づけが高く，形成動機づけは低い」という仮説を実証しようと試みた。が，表5からは，満足群の方が不満足群よりも「内発的・形成動機づけ」も「内発的・維持動機づけ」も高いということが分かった。一方，外発系の動機づけは両群間に有意な差はなかった。この結果は表9のようにまとめられる。

表9 満足群と不満足群の動機づけ比較

	形成動機づけ	維持動機づけ
	満足群>不満足群	満足群>不満足群
内発的		
外発的	n.s.	n.s.

この表からも明らかなように、満足感という観点だけで考えるなら、友人関係動機づけを「形成動機づけ」と「維持動機づけ」の2つに分けることは妥当ではないといえそうな結果であった。とはいえ、調査前には想定していなかったことだが、少なくとも内発的動機づけと外発的動機づけの分別は有効であるといえそうである。岡田のモデルをより精緻なものにしていく上で、参考となる知見であろう。

2. 友人への感情の動機づけに対する影響について

本項ではさまざまな質の動機づけに対して友人へのどんな感情がどう影響しているのかについて詳しく検討したい。結果の表8に示された通り、満足群と不満足群には共通する箇所と異なる箇所がある。以下に共通項と相違点それぞれ別に項を立ててみていきたい。

2.1. 満足群と不満足群に共通の傾向

満足群、不満足群に共通するのは、「信頼」感情は内発的な形成・維持動機づけを高める方向に働くこと、「差異への不安」感情は外発的な維持動機づけを強めること、「ライバル心」は内発的な形成動機づけを高めることである。

まず共通点のうち、内発的動機づけについてみていく。「信頼」感情が内発的維持動機づけだけでなく内発的形成動機づけにも肯定的な影響を及ぼすということからは、友人が信頼できるという感情が形成されると汎化され、他者一般への信頼感につながっているということなのかもしれない。その結果、その友人との関係を維持しようというだけではなく、新たな関係をも喜んで模索するようになるのであろう。これに対し「ライバル心」は、内的な形成動機づけにのみ影響を及ぼす。「ライバル心」とは相手に対して負けたくないという意識であるが、重点は勝ち負けそのものにあるのではなく、それを通じて自らを向上させていこうとする点にある。この意識が強いほど、より多くの点での競争、またより高いレベルでの競争のために新たな友人との関係を求めるのは、それなりに理解しやすいことであろう。

なお、両群ともに外発的な維持動機づけに「差異への不安」が影響しているという結果であるが、これについては次項でまとめて検討したほうが理解しやすいので、ここでの考察は省く。

2.2. 満足群と不満足群の相違点

相違点として目立つのは、不満足群では「独立意識」がすべての動機づけに対して負の影響を与えることである（表8参照）。不満足群は今の友人との関係に満足できていないわけであるが、にもかかわらず、表6を見ると分かるように満足群よりも「独立意識」が低い。つまり友人に流されるように行動してしまいがちなのである。しかしもし何らかのきっかけで流されまいとする意識が高まる（すなわち「独立意識」が高まる）と、不満足群は今の友人関係から遠ざかろうとするが、それに留まらず、新たな関係を開拓しようという行動についても抑制的となるという結果であった。このことから友人関係に不満足である場合、友人との間で一線引くことはそのまま孤立や引きこもりへの傾向に直結するということになるといえるのではないだろうか。これに対して満足群では、「独立意識」はむしろ内発的的形成動機づけに正の影響を及ぼす傾向にある。なれ合いにならないようにという意識が、関係をより広いものにしようと動機づけるわけである。

このように、同じ「独立意識」も友人関係への満足度次第でまったくその後の行動への動機づけが異なるという結果であった。

その他の相違点についても見ていきたい。不安が外発的な動機づけを強めるのは外発的動機づけの定義上当然のことであろうが、動機づけに働きかける不安の質に違いがあることが今回の調査から明らかとなった。外発的動機づけと不安の関係に絞ってみていくと、満足群では「不透明さへの不安」が外発的な形成・維持動機づけを強め、「差異への不安」も外発的維持動機づけに影響し、外発的動機づけにもやや高い標準化偏回帰係数 (.162) を示した。一方で、不満足群では「不透明さへの不安」は動機づけに有意な影響を及ぼさず、「差異への不安」だけが外発的な形成・維持動機づけを強めるという結果となった。すなわち満足群では、関係への不安が生じるようなことがあればそれがどんな不安であったとしても友人や周囲への働きかけを増やすことに結びつくが、不満足群では友人がどんなことを考えているか分からなくて不安に感じて行動にはつながらず、友人との違いが突きつけられた時に初めて行動へとつながるといえる。満足群では関係におけるネガティブな事態さえも交友を広げるきっかけになるのに対し、不満足群では差異が目にはっきりと提示される事態にならない限り、新たな関係作りに動くことができないということである。

最後に、ここまでまだ取り上げられなかった有意なパスを見ていく。不満足群における「不透明さへの不安」は内発的な維持動機づけに有意な正の影響を及ぼしており、「ライバル心」は内発的な形成動機づけだけではなく外発的な形成動機づけにも影響していた。前者はなぜそうなるのか解釈しにくい結果であったように思われる。が、たとえばDV被害者は一般に、相手が何を考えているのか分からないという不安を掻き立てられれば掻き立てられるほど、自発的に相手との関係を維持しようとするメンタリティがあるが、それになぞらえれば理解できるかもしれない。また後者に関しては、先述の通り「ライバル心」は基本的に、向上心を背景にしてより広く友人を開拓していこうと動機づけると考えられる。しかし不満足群の場合には、もし新たに友人を作ることができなければ現状の友人関係の中にとどまらざるを得ない、という不安な気持ちも同時に働いているがゆえに友人関係を作ろうとするのかもしれない。その結果、自発的ではない働きかけが増えるということではないだろうか。

まとめと今後の課題

今回の研究では岡田（2008）が提唱した友人関係に関するモデルをもとにして、友人関係動機づけを「形成動機づけ」と「維持動機づけ」の2つに分けることの妥当性を実証しようとした。その結果、満足度という変数の導入だけでは2つに分別することの妥当性は認められなかった。しかし、満足度以外の「友人への感情」という変数を導入して検討すると、形成動機づけには影響せず維持動機づけにのみ影響する感情やその逆のパターンがあることも分かった。すなわち、動機づけを細分化して検討することは十分に意味があるということが示唆されたと言えるであろう。

今後の課題を、いくつか挙げておきたい。1つ目は、友人関係の閉鎖性についてである。石田・小島（2009）の研究によると、すでに形成された仲間集団においては集団内では高い親密性が維持されている一方で、集団外の成員に対しては閉鎖的や排他的であるということが分かっている。しかし今回の結果では、友人に対して「信頼」の感情を抱くほど、その他の人への働きかけが増えるという結果であったわけである。では石田らも指摘する集団にみられる閉鎖性をどう理解すればよいのだろうか。この点は今後の課題であろう。

また、今回の調査からは「独立意識」が満足群と不満足群とではまったく異なる影響を及ぼすことが分かった。ひょっとすると両群における「独立意識」は、同じ概念であっても内実は質的にかなり異なっていた可能性がある。他の友人への感情との相関係数を見ても（表7参照）満足群と不満足群では少々異なる点もある。そのあたりを掘り下げるような研究も、今後の課題であるだろう。

引用文献

- Baumeister, R. F. & Laery, M. R. (1995) . The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Buhrmester, D. (1996) . Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb & W. W. Hartup (Eds.) , *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence* (pp.158-185) . New York: Cambridge University Press.
- 榎本浩子（2000） 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 *教育心理学研*,48, 444-453
- 堀洋道編（2007） *心理測定尺度集IV 子どもの発達を支える<対人関係・適応>* サイエンス社
- 石田靖彦・小島文（2009） 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連 ～仲間集団の形成・所属動機という観点から～ *愛知教育大学研究報告書*,58（教育科学編）, pp,107-113, March, 2009
- 加藤司（2001） 対人ストレス過程の検証 *教育心理学研究*,49（3）,295-304
- 黒田祐二・桜井茂男 2003 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム—ディストレス/ユーストレス生成モデルの検討— *教育心理学研究*,51, 86-95.
- 松永真由美・岩本澄子（2008） 現代青年の友人関係に関する研究 *久留米大学心理学研究*, 7, 77-86
- Ojanen, T., Gronroos, M., & Salmivalli, C. (2005) . An interpersonal circumplex model of children's social goals: Links with peer-reported behavior and sociometric status. *Developmental Psychology*, 41, 699-710.
- 岡田涼（2005） 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論

- の枠組みから パーソナリティ研究,14 (1) ,101-112
- 岡田涼 (2008) 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, 56 (4) ,575 - 588.
- Okada, R. (2007) . Motivational analysis of academic help-seeking: Self-determination in adolescents' friendship. Psychological Reports, 100, 1000-1012.
- Richard, J. F. & Schneider, B. H. (2005) . Assessing friendship motivation during preadolescence and early adolescence. Journal of Early Adolescence, 25, 367-385.